

都市史としての墓地

～大阪市公営墓地の変遷と無縁化社会の進行～

槇村久子*

近代化、都市化の過程で墓・墓地は個人化、無縁化、流動化が起き、それを超えるものとして共同化、無形化、有期限化を既に導いた。現在少子・高齢・人口減少社会という大きな社会変動に大都市の葬送空間はどの様に対応していくのか。大阪市の公設墓地を取り上げ、都市の発展との連動と変化を明治初期から現代までを検証した。南浜、南、瓜破、服部の各霊園と泉南メモリアルパークの墓地調査と南霊園の墓碑調査から、無縁化社会の進行する中で、〈個〉としてのライフヒストリーだけでなく、都市に生きる人々〈群〉や墓地という都市施設〈群〉は都市の形成や変化を記憶、記録する都市史として重要な意味をもつ。

キーワード：墓地、都市史、大阪市、近代、
無縁化

はじめに

近代化、都市化の過程で、墓・墓地は個人化、無縁化、流動化を起し、それを超えるものとして墓の共同化、無形化、有期限化を導いた。有期限の墓は日本ではほとんど見られないが、既に家族墓の他に、合葬墓、散骨や樹木葬、インターネットの墓もある。現在の少子・高齢・人口減少という大きな社会変化に大都市は葬送空間としてどのように対応していくのか。大阪市の公営墓地を取り上げ、都市の発展とどのように連動、変化してきたかを明治はじめから現在までを見る。その中

* 京都女子大学 教授
大学院 現代社会研究科

で、家族の変化による〈個〉として共同化、無形化、有期限化の方向の一方、〈群〉として都市に生き、都市を形成する人々、また墓地の位置等の変容は都市の変化を記録する都市史として重要な意味を持つことを探りたい。大阪市の南浜霊園、南霊園、瓜破霊園、服部霊園、泉南メモリアルパークの墓地調査、また南霊園の墓碑調査を基に考察する。

1. 大阪市の墓地の概要と位置

大阪市には、2010年（平成22年）現在、64ヶ所の市立霊園があり、公園式墓地では服部霊園、瓜破霊園、泉南メモリアルパークがある。また大規模墓地として南霊園と北霊園がある。この4つの大規模霊園以外に、大小規模の58霊園が市内に点在している。

このような58墓地は「引継ぎ霊園」と呼ばれ、元来は村墓地、集落墓地といわれるもので、市町村合併で大阪市に編入したときに寄付され、大阪市が引き継いだ墓地である。現在もそのほとんどが、地元の墓地管理委員会によって管理されている。また、墓地の利用者も地元の人たちがほとんどで、公募は全く行われていない。

例えば、西淀川区には大和田、稗島、佃、福、大野、御幣島、野里など、15の区に点在する。現在大阪市には24区あるが、墓地の位置には偏りがある。（表-1）

表-1 各区にある市設霊園の場所と数

区	霊園名
北	北・南浜
都島	赤川・善源寺
西淀川	大和田・稗島・佃・福・大野・御幣島・野里
淀川	三津屋・東三国・十八条・加島東
東淀川	国次・大道・上新庄・山口
生野	鶴橋・巽
旭	森小路・上辻・別所・北清水・生江・江野
城東	新喜多・中浜・左専道・関目
鶴見	今津
阿倍野	南・北島・奥大原
住之江	安立南・住之江・安立・北島・南加賀屋
住吉	住吉・千鉢・西長居・遠里小野・我孫子・杉本・山之内・荻田・庭井・浅香
東住吉	松原・東長居・杭全・今川・今林
平野	加美・平野・喜連・平野市町
西成	今宮・粉浜

（出所：『平成22年度わたしのまち・きれいな大阪』大阪市環境局）

1874年（明治7年）に設置された北霊園（長柄）と南霊園（阿倍野）は大規模墓地として最も古い。しかし都市の発展と人口増加に伴い、1940年（昭和15年）に当時に中河内郡瓜破村に瓜破霊園を、その翌年には当時豊能郡熊野田村に服部霊園の2大公園墓地を設置した。両墓地とも、大阪市域外の南と北の位置に設置している。

大阪市内には、このような市設墓地64以外に、財産区有墓地48、寺院有その他墓地が476ある。平成14年1月1日現在の資料で市設霊園の合計面積は982418m²、墓石数約9万2400基（平成23年度3月末資料で修正すると約9万2000基）である。（表-2）（表-3）

表-2 主な霊園の面積と墓石数、開設年などの一覧
(平成14年1月の数値を平成23年3月末の数値で一部修正)

霊園名	面積 (m ²)	霊地面積 (m ²)	総面積に 対する割合	貸付件数	墓石数	開設年月
泉南メモリアルパーク	337,530	計画83,000 完成60,963	24.6%	18,667	17,821	昭和54.10
瓜破	280,772	85,144	30.3%	12,304	15,239	昭和15.5
服部	192,448	57,268	29.8%	7,884	9,474	昭和16.4
南	61,319	39,522	64.5%	9,826	13,697	明治40.2買収
北	20,236	約14,200	70.2%	3,169	3,766	明治40.2買収
加美	15,350	約2,400	15.6%	599	1,201	昭和30.4合併
その他 (58霊園)	74,763	約41,900	56.0%	約25,900	約30,900	
計 (64霊園)	982,418			約78,300	約92,000	

(出所:「大阪市における墓地のあり方検討にあたって」大阪市環境事業局)

表-3 大阪市内の墓地数

	区分	墓地数	面積	墓石数
墓地数 585	市設霊園	64	982418m ²	約92,000基
	財産区有墓地	48		
	寺院有その他墓地	476		

(出所:同上)

2. 都市の公共施設として時代と墓・墓地の様式の変化

(1) 江戸末期から明治はじめの南霊園と北霊園まで

江戸時代は、貞享・元禄時代から明治初期にかけて、「大坂七墓」と呼ばれる墓地があった。(貞享・元禄時代は、貞享年間は1684年から1687年、元禄年間は1688年から1703年で、明治元年は1868年である)。

梅田、千日、小橋、鳶田、浜、吉原、加茂(蒲生)の七ヶ所で、大阪城を中心とした市街地の周辺に位置していた。(図-1)

ここには墓地と火葬場(茶毘所)があり、葬儀に必要な器具を常備し、大坂三郷とこれに接する村落の火葬を行っていた。火葬だけ

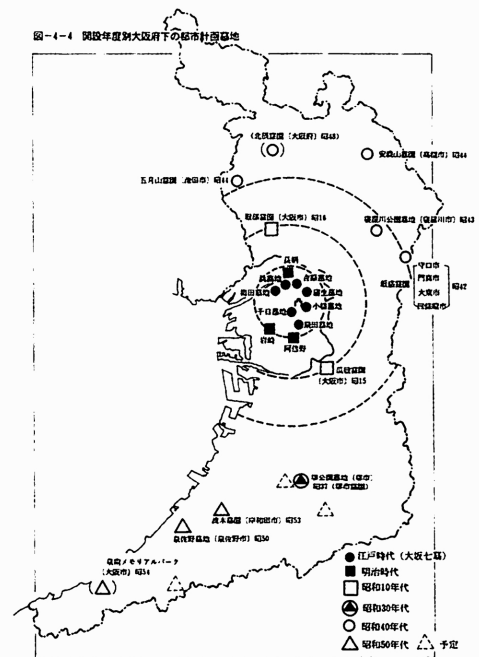


図-1 旧墓地・都市計画墓地位置図

ではなく、式場の飾りつけやその他葬儀に関する業務を取り扱っていた。

「一方、装具類の賃貸・販売を業とする『色屋』と称する業者も存在していた。しかし、他人の不幸に乗じて法外な利益をむさぼるので、その弊害がはなはだしく、当時、こうした業者に対する非難も少なくなかった。そのため、大阪府では、このような業者の弊害をなくすために火葬禁止令を発するとともに、天王寺村と長柄村と岩崎町に埋葬地を新設した、と記されている（大阪市環境事業局、2003）。これが現在の南霊園と北霊園である。

しかし、火葬禁止令は、明治政府の宗教上、政治上の問題として墓地をめぐる激動を伝えるものである。1873年（明治6年）6月18日太政官布達による火葬の禁止を出し、また2年も経過しない1875年（明治8年）5月23日に火葬禁止の布告を解除する太政官布達を出している。

江戸時代には火葬と土葬のどちらも行われていて、特に江戸や大坂の大都市では広く火葬が普及していた。しかし、明治政府の離壇政策から火葬を禁止し、1874年（明治7年）の太政官布達により、東京市青山墓地は神葬祭地として、一般の墓地と定められている。都市部では火葬が禁止されると大変な混乱が起きたことはいうまでもない。火葬禁止令の混乱が、結果的に都市施設として、公営の埋葬所、つまり公営墓地の設置を促し、火葬場の増加をもたらしたことが『近代日本墓地の成立と現代的展開』（p24 - p26）に記されている。

(2) 初めての公園墓地の瓜破霊園と服部霊園

大阪市は人口集中に伴って市域を拡張していったが、その時に、旧町村有の群小墓地を継承し、その後も市の一部有墓地として、寄付収受を受けたものがあつた。しかし、これらの墓地は、付近住民以外はめったに使用しない上に、ほとんど充足していた。そのため、場所や交通の便の良いなどの関係で、面積の大きい天王寺墓地や長柄墓地に一般の使用が集中することになった。

その結果、両墓地は使用余地が極めて少ない状態になってしまった。しかし、天王寺墓地と長柄墓地以外はどこも用地が狭く、また人口密度が高い市街地に位置している。さらに管理も十分でなかったために公衆衛生上や宗教上の観点から、移転整理をする必要に迫られていた。

そこで新たに設置されることになったのが、大阪市で初めての公園墓地である瓜破墓地と服部墓地である。大阪市では市域の南北に2大公園墓地を造って、墓地に対する市民の需要に応えるとともに、市内にある群小墓地を移転改葬することを目的としていた。北部の服部墓地は豊能郡熊野田村（現在豊中市広田町）に5万2400坪（173200m²）、南部の瓜破墓地は中河内郡瓜破村（現在大阪市平野区瓜破東）に6万200坪（199000m²）の土地を選定し墓地の新設を決定。1928年（昭和3年）5月に内閣の認可を得て、翌月都市計画決定の市長告示を行った。その後、実施計画を立案し、1934年（昭和9年）に一応の成案ができたが、さらに数回の改訂をした結果、1938

年（昭和13年）から都市計画による3ヵ年継続事業として、瓜破村に約206500m²、豊中市に180700m²の墓地造成に着手した。そして瓜破霊園は1940年（昭和15年）5月に、翌年に服部霊園は1941年（昭和16年）4月にそれぞれ竣工して、すぐに共用を開始している。

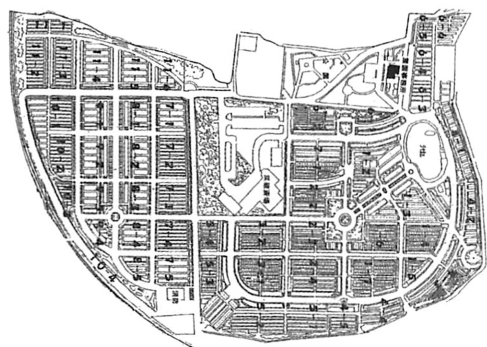


図-2 瓜破霊園平面図



図-3 服部霊園平面図

この時の1940年（昭和15年）5月に、「大阪市設墓地使用条例」（1915年（大正4年）制定）が「大阪市設霊園条例」に全面改正され、「墓地」の名称が「霊園」に変わっている。

この2つの公園墓地は、大阪市内ではなく、

隣接市に位置している。服部霊園と瓜破霊園は、東京市（当時）がやはり市域を離れて西多摩村に造成した、かつ日本で初めての公園墓地様式である多磨霊園の理念、計画、設計に基づいて造られている。（図-2）（図-3）

例えば設計の一例として、服部霊園は多磨霊園と同様に、敷地の中央部に名誉霊域をもっている。

両墓地の特徴の一つは、敷地の一角に納骨堂があることだ。大阪市では以前から納骨堂の設置を検討していたが、新しく瓜破と服部の両墓地が完成したことをきっかけに、納骨堂の建設を決めた。そこで翌年、瓜破霊園には1941年（昭和16）2月、服部霊園には1942年（昭和17年）8月にそれぞれ納骨堂を建設している。

ところが、さらに都市市民の墓地の利用が高まることになる。戦時中から戦後にかけて、大阪市はこの瓜破霊園と服部霊園を主に供用してきた。しかし墓地利用者の激増によって、この2つの霊園とも利用ができなくなり、市民の新しい需要に応えられなくなった。そこで昭和34年度に瓜破霊園の隣接地を大阪市が買収し、都市計画事業として新規拡張を実施することになった。1960年（昭和35年）3月に都市計画決定を受けて、1960年（昭和35年）度から4ヵ年の継続事業として、霊域を拡張して順次供用していった。

しかし瓜破霊園の拡張にもかかわらず、服部霊園の方は大阪市の北部という立地条件から特に希望者が多く、1961年（昭和36年）度と同霊園内の低湿地18500m²を盛土し、土質

が十分固定するのを待って、1963年（昭和38年）度に造成し、すぐに供用を開始している。

しかし、さらに市民の墓地需要を一層高める時代になっていた。それは、戦後の混乱期を経て高度経済成長期に向かい、市民の生活水準が高まり、また世情が安定したからである。墓域の拡張にもかかわらず、瓜破霊園、服部霊園ともに、1965年（昭和40年）度には全域供用済みとなり、市民に墓地を供給できなくなった。

戦後の土地区画整理や戦災復興の都市開発は墓地の移転を進めた。

大阪市の都市開発に伴う高速道路の設置は、市内にまだ残っていた小規模墓地の移転や、天王寺の南霊園の一部移転の形で影響している。阪神高速道路大阪松原線の工事により南霊園の墓地の一部（北側部分）が瓜破霊園へ移転することになり、1970年（昭和45年）4月から始まり1974年（昭和49年）4月に移転が完了した。

納骨堂もその後変化している。服部霊園に建設されたものは、老朽化のため1959年（昭和34年）7月に撤去し、また瓜破納骨堂も、祖先の御霊を安置する施設としては貧弱であり老朽化してきたとして、1965年（昭和40年）10月から業務を停止した。そこで、新しく服部霊園に、清潔で近代的な納骨堂をと新設し、瓜破霊園の納骨堂を移転することとして、完成とともに昭和41年6月から服部納骨堂の供用を開始した。

(3) 芝生式公園墓地の泉南メモリアルパーク

上記のように、新たな市民の墓地需要に対応するために、大阪府泉南郡阪南町（現在は阪南市箱作）に、34haの用地を買収し、1977（昭和52）年度から全体計画27500区画の造成工事に着手した。これは、大阪市としては初めての芝生式公園墓地である。総面積340000m²のうち、霊域（墓所）は83000m²（27000霊地）、施設・園路が26000m²、緑地が231000m²。敷地の約4分の1だけが墓所として使用しているだけで、また一霊地3.025m²（縦2.75m、横1.1m）は均等区画で仕切られておらず、芝生で敷き詰められている。また墓石はすべて洋型に統一されている。（写真-1）（図-4）



写真-1 泉南メモリアルパーク

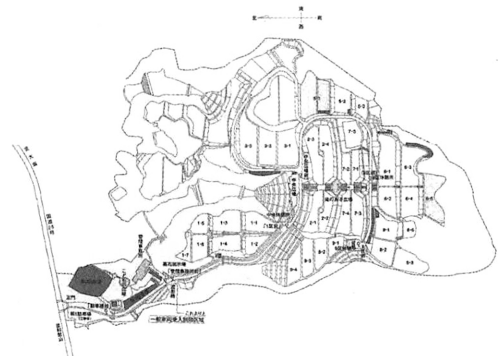


図-4 泉南メモリアルパーク平面図

大阪市市民の利用する霊園であるが、大阪府と和歌山県の府県境に位置する市内から遠距離に造成されている。

大阪市として長年の懸案であったこの新しい霊園は、昭和54年10月に、その名も「泉南メモリアルパーク」として開園した。この霊園の管理は、昭和53年11月に設立された(財)大阪市霊園サービス公社に委託されている。

(4) 公共で初めての合葬式墓地

合葬式墓地は2010年（平成22年）3月に瓜破霊園の一角に設置されたばかりである。パンフレットには「近年の都市化・少子高齢化といった社会情勢の変化に合わせて、利用される方の多様なニーズにお応えする新しいタイプのお墓」として、初めて大阪市の公共の合葬式墓が設置されたのである。既に民間霊園や寺院境内墓地には多く設置されている。建築面積244m²、地上一階、地下一階、敷地の池に面して参拝スペースがあり、池の中にある島（追悼の丘）の地下に合葬室と納骨壇がある。合葬室は24000体、納骨壇は4000体を収めることができる。直接合葬型と、10年間と20年間保管後に合葬する保管型合葬型が選択できる。合葬墓に近接して、記名板が設置されており、本名と生年月日・死亡年月日を希望で彫刻できる。生前に申し込みが可能で、2010年に65件の利用・申し込みがされている。墓地の立地が市内から遠隔化している中で、この合葬式墓は市内にある。(写真-2)(写真-3)

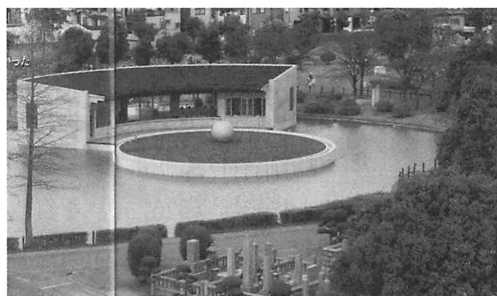


写真-2 瓜破霊園合葬式墓地全景



写真-3 瓜破霊園合葬式墓地

(5) 外国人墓地

服部霊園の一角に、外国人が眠る墓地がある。これは服部霊園に当初からあるものではないことがわかった。大阪の外国人墓地は、1867年（慶応3年）5月に、日本政府とイギリス、アメリカ、フランスとの間に締結された「兵庫港並びニ大阪ニ於テ外国人居留地ヲサダメル取極」第11条にもとづいて、大阪市西区川南池山新田にあった瑞軒山に建設されたことに始まる。1899年（明治32年）7月に各国との間の通商条約が改正されて、居留地制度がなくなったために、この「取極」もその効力を失ったため、同年9月に政府は外国人居留地に関する様々な事務を府縣市町村に移管した。そのため、西区の池山新田外国人墓地は、大阪市が継承することになった。し

かし、「当時の府知事と各国総領事との間の取り決めなどもあって」、1900年（明治33年）5月に、大阪市は東成郡天王寺村大字天王寺字西金塚（現在は阿倍野区旭町3丁目）に、新外国人墓地用地2790坪（9207m²）を買収。1901年（明治34年）1月に府知事の許可を得て着工して、1902年（明治35年）6月に完工している。一方、瑞軒山墓地の新墓地への移転が1902年（明治35年）9月に許可され、1904年（明治37年）5月に改葬移転が完了している。この時、旧墓地から新墓地へ改葬移転されたのは8体であった。（大阪市環境事業局、2003）

その後、国交の広がりとともに、イギリス、アメリカ、フランスの他、カナダ、ソ連、インドの人たち等にも使用許可を与えてきた。しかしこの墓地周辺も戦後の発展に伴い、1960年（昭和35年）6月から11月の間に、1941年（昭和16年）に新設された服部霊園に再び移転改葬している。現在服部霊園内の北部の一角に見られる。

(6) 墓地の設置・管理・運営形態の変化

墓地の設置、運営、管理の形態も公設公営から民営など、時代の社会経済に応じて変化している。明治初期、火葬禁止令が発布されたことで、当時大阪府は天王寺村と長柄村と岩崎町に埋葬地を新設し、大阪府が管理した。しかし、火葬禁止令が解除された後、民間業者8人が火葬営業を出願したため、大阪府は共同経営することを勧告し、3箇所の埋葬地のそれぞれ一部の払い下げを受けて火葬場の

建設をした。「八弘社（当初八弘舎）」は、火葬場とは別に、埋葬地を払い下げを受けていたものから譲り受けて、墓地も経営することになった。1982年（明治15年）7月に「大阪八弘株式会社」にしている。

しかし、埋葬・火葬は本来的に公益性な性格を持つものであると、大阪市は1907年（明治40年）2月に市営に移す計画を立てて、営業権と不動産、動産をすべて買収して事業を継続することになった。このような墓地・火葬場の公設公営の状態が長く続いたが、泉南メモリアルパークは管理運営を（財）大阪市霊園サービス公社に委託、さらに（財）大阪市環境事業協会に業務委託している。さらに近年大阪市の財政状態から、墓地の管理運営を指定管理者制度を2008年（平成20年）から導入し、民間に委ね始めている。

3. 都市史としての墓地—南霊園墓地調査から

墓や墓地は個人や家族のライフヒストリーであるだけでなく、都市史としても意味がある。その一つが、その都市を誰が創ってきたかを墓碑により知ることができる。

南霊園は明治7年の開設であり、近代の黎明期、大阪に生きた人々の墓が現在も保存されている。（東京都では、青山霊園等に見ることができる）南霊園は現在大阪市阿倍野再開発地区の南側にあり、また1970年（昭和45年）からの阪神高速道路の開通に伴い、道路沿いに北側の一部が削られ移転しているが、当時の状況がよく残されている。（写真-4）



写真-4 現在の南霊園

そのため、南霊園の墓地調査と墓碑調査を、2011年8月～9月に実施した。

南霊園は61319m²に、約13800基が存在する。広大な敷地と墓石数のため、管理は6区に分けられ、またそれぞれの区を30～60区画程度に分けている。膨大な約13800基の中から、今回の調査では、一区画の中で、1、10、20、…というように、10飛ばしでの小区画を悉皆調査した。つまり10分の1の区画を調査したにすぎない。また、同霊園が保管する著名人の墓の一覧表により個別調査した。

調査項目は、(1)墓標、墓誌、地藏、塔婆立て、無縁供養塔などのモノ、(2)墓標の①形(和型、和型変形、洋型、五輪塔)、②定型(家名のみ、家、家の墓、家先祖代々、個人名、その他)、③宗教(妙法、妙法蓮華経、南無大師返照混合、南無釈迦尼、南無阿弥陀仏、俱合一処、奥津城、奥都城、奥城、十字架、聖書の一節など)、④文字以外 (3)寿陵墓、建立年月日、建立人数など。

調査カードの項目に○印を付ける方法とし、調査カードは東北大学文学研究科宗教学研究

室・鈴木岩弓氏の調査項目で一部を除いて同様とした。

墓碑調査には膨大な時間と労力等が必要となる。同霊園の墓碑調査はまだ途上であり、本稿はその結果の一部を考察したものである。

・近代の大阪をつくった人々

近代の日本に紡績業を移植した東洋紡績社長、言論を引っ張った大阪毎日新聞、朝日新聞の各社長、実業界や経済の基盤を作った大阪商工会議所創設者、阪神南海鉄道や大阪ガス社長など実業界を形成した人々、市長や知事、貴族院議員の政治家、大学や福祉事業を始めた人、歌舞伎役者や三味線の名人や舞踊家、書や画家、興行師等々。古いが、昭和31年版阿倍野区史抽出分・大阪観光協会抽出分と書かれた南霊園に眠る著名人の一覧表には、判明しているだけで、36人の墓が載っている。(表-4)

山邊丈夫は紡績技術をイギリスのマンチェスターで学び日本に本格的に移植。日本の資本主義の父と言われた渋沢栄一とともに大阪紡績を設立し、後に東洋紡初代社長を務めた。片岡直方は大阪ガス社長、片岡直輝は阪神南海鉄道社長として都市のインフラを形成。土居通夫は鴻池を建て直し、大阪電燈や京阪電鉄社長、日本生命の取締役など経営。外山修造は日本銀行大阪支店長や大阪貯蓄銀行頭取として金融界を。大阪の経済界の基盤を最も作ったのは五代友厚である。五代は大阪株式取引所(大阪証券取引所の前身)、商法会議所(大阪商工会議所の前身)、商業講習所(大阪市立大学の前身)の開設に関わった。また

表-4 南霊園に眠る著名人の墓の一覧表

故人名	職 種	没年
山邊 丈夫	東洋紡績社長	大正9.5.14
奥村 信太郎	大阪毎日新聞社社長	昭和26.3.4
小山 健三	実業家	大正12.12.21
片岡 直方	大阪ガス社長	昭和24.3.21
片岡 直輝	阪神南海鉄道社長	昭和2.4.13
本山 彦一	大阪毎日新聞社社長	昭和7.12.30
重松 翠	飛行家	大正3.4.26
関 一	大阪市長	昭和10.1.26
西村 天因(時彦)	文筆家 朝日新聞編集長	大正13.7
岡本 撫山(春彦)	文学士	明治37.12
小橋 實之助	実業家、博愛社社長	昭和8.6.19
生田 南水(福太郎)	先考生田南水十年祭建立	昭和9.1.12
山村 友五郎	舞踊家(上方舞山村流開祖)	初代天保15 2代目 明治28
奥田 弁次郎	千日前に興行小屋を出し、歓楽地千日前の起こりとなった	明治31
日柳 三舟	陸軍兵学校大属(師範学校長)、教科書出版の功績者	明治36
村山 龍平	大阪朝日新聞社社長(創立者)、貴族院議員	昭和8.11.25
玉木 愛石	書道家	昭和3.9.13
林 歌子	大阪婦人ホーム理事長、社会事業家	昭和21.3.24
庄野 貞一	帝塚山学院長	昭和25.10.9
五代 友厚	大阪商工会議所初代会頭(実業家)	明治18.9.25
菅 楯彦(藤太郎)	画家	明治38.9
外山 修造	実業家(日本銀行大阪支店長、大阪貯蓄銀行頭取)	大正5.1.13
死節群士	長州毛利藩四十八士、元治元年6月鳥羽伏見の戦で大坂桜宮で	元治元年
岡 常夫	東洋紡績社長	昭和2.1.22
桐原 拾三	大阪毎日新聞社専務取締役	大正15.8.25
沼田 嘉一郎	代議士	昭和12.11.12
中村 雀右衛門	歌舞伎役者2代目	明治28.7.20
中村 雀右衛門	歌舞伎役者3代目	昭和2.11.15
菊池 米太郎	回生病院院長	昭和28.2.11
高崎 親章	大阪府知事、貴族院議員	大正9.12.28
大三輪 長兵衛	大阪市会初代議長、府会議長	明治41.1.31
敷田 年治	国学者、百楽塾による門人育成	明治35.1
土居 通夫	大阪商工会議所会頭	大正6.9.9
豊田 団平	三弦演奏家(近世三味線名人)	明治31.4.1
臼田 馬造	歯刷子製造機、トラ印クリームを日本で発明し、海外へも輸出	大正7.3

(同霊園にある昭和31年版阿倍野区史抽出分・大阪観光協会抽出分の一覧表から作成)



写真-5 五代友厚の墓

事業家として鉱山経営、紡績、鉄道事業などの設立経営にも参画している。(写真-5)

新聞では、本山彦一は大阪毎日新聞社長(毎日新聞の前身)で中興の祖と言われ、サンデー毎日や英文毎日、点字毎日を創刊し、社会事業団も創設して文化・福祉事業にも乗り出した。村山龍平は毎日新聞のライバル紙である大阪朝日新聞を創立し、貴族院議員にもなっている。

関一は名市長で誉れ高い七代目大阪市長で、御堂筋を拡幅して幹線道路とし、地下鉄御堂筋線を開通させ、また大阪城天守閣を再建した。市長に就任したのは1923年(大正12年)で新たな時代の都市創造や都市の骨格を形成した。

庄野貞一は私立の帝塚山学院長。林歌子は売春反対、女性解放運動に生涯を捧げ、大阪婦人ホーム理事長など社会事業家である。同ホームは元遊女らを守り仕事を斡旋するために設立し、林の墓に隣接して「大阪婦人ホーム共同墓地」の墓碑がある。医療では回生病院院長の菊池米太郎。

文化を形成した人々も多い。山村友五郎は江戸時代に上方舞の山村流を開き、歌舞伎役者2代目中村雀右衛門、3代目中村雀右衛門、近世三味線の名手と言われた豊澤団平がいて、歌舞伎や人形浄瑠璃の盛んであった。菅橋彦は明治期に活躍した日本画家で、四条派、狩野派、土佐派、浮世絵を研究し、独自の画風を確立した。旅芸人の供養のために墓碑を建立し、また千日前を歓楽街に育てたのが奥田伝次郎である。1870年(明治3年)に千日前の刑場が廃止され、千日前墓地が阿倍野墓地(南霊園)へ移転した跡地に、すぐに露天商仲間を集めて夜店を出し、さらに興行の許可を取って千日前を歓楽街に形成していった。奥田の墓には名前の横に「千日前」を彫られている。旅芸人の墓は巨大な記念碑ともいうもので、「奥田知人死亡者」として68人の名前が刻まれている。

このような墓碑は個人史、ライフヒストリーであるだけでなく、誰が各分野でどのように都市を形成していったのかを伝える、都市史である。個人の墓碑だけでなく、共同墓は著名人の墓のように都市を創造していく明るい面ではなく、人々の不慮の死という暗い面を伝えている。

・都市の事故や災害を伝える共同墓

同霊園には個人や家族の墓の他に、いくつかの共同墓がある。「死節群士」の墓(写真-6)、竹田劇場焼死者の墓(写真-7)、それに南霊園の一番奥にある警察官の墓地や、無縁墓などである。近代大阪市が造られる直前に、長州毛利藩四十八士が、1864年(元治



写真－6 長州毛利藩四十八士の墓

元年) 鳥羽伏見の戦いで最後大阪桜ノ宮で戦死した若者たちが「死節群士」の墓である。

竹田劇場の火事では多くが焼死し、身元がわからない人々が埋蔵されている(墓の名義人は辰野貴之と記されている)。都市の治安を守る警察官も不慮の死に遭うことがある。専用墓地には職階は様々だが、多くの墓碑に殉死と記されている。無縁墓は後で述べるが、南霊園は開設時から、「別に等外地を設けて変死者または囚人の死体、その他生活困窮者



写真－7 劇場焼死者の墓

の死体を埋葬」しており、無縁墓として葬られている。このような人々は都市における火事や事故や災害、疫病の流行などの不慮の死を遂げた市民で、都市の出来事を伝えている。

・阿倍野墓地と周辺や跡地の開発

南霊園が設置された1874年(明治7年)は、周辺の都市開発のきっかけになったことがわかる。明治初年は一望千里の田畑と原野であった。そこに南霊園が開設され、さらに火葬場ができ、葬儀にかかわる店舗や参拝者など人々が多く集ようになっていき、現在の都市開発に続いていく。ここに移転してきた千日墓地の跡地も現在大阪ミナミの繁華街を形成している。墓地は都市の発展に従って周辺に移転してきた。当時都市周辺に設置された南霊園も、現在の阿倍野地区の再開発など「周辺地域の市街地化が急速に進むなか、周辺住民からは地域の発展を阻害しているとして、相当以前から全面移転要望が出されている。諸般の状況から移転は困難であるため、相当数あると思われる無縁跡地を整理して…」(大阪市環境事業局、2003)と、墓地は都市開発のきっかけになり、また発展の阻害要因にもなることを示している。

・墓碑調査から見る家族や宗教の変化

南霊園の墓地調査から、先に述べた都市を形成してきた人々を見ると、様々なことがわかる。五代友厚は薩摩藩藩士で、土居通夫は宇和島藩藩士など、その他の墓碑にも土佐藩、薩摩藩など経済界で活躍し近代の大阪を形成した人は大阪出身者でない人が多い。無念の死を遂げた長州毛利藩の若者たちも近代大阪

の形成の礎になった。当時は都市に人間が流動的で進取の気風があったとも考えられる。

男性だけでなく妻の働きや位置も墓碑から見るができる。(写真-8) 夫婦の名前が刻まれた墓碑も多く、当時は夫婦が家や経済を支えていたことがうかがえる。先に述べた「縦五位山邊丈夫之墓 同妻定子之墓」、「菅橋彦 妻美紀之墓」など著名人の墓の他にも、商家を兄弟二家族で経営したと思われる夫婦2組の名前が一つの墓碑に刻まれた例など、夫婦の名前や、夫婦で一つずつ二つの石碑もある。



写真-8 夫婦の氏名を彫った墓

また、墓標から石碑の形や彫刻されたもの、宗教等の変化も読み取ることができる。まだ詳細の集計は途上であるが、明治期は石碑の形、大小も多様であり、家名もあるが個人名が彫刻された石碑も多く、また奥津城など神道系の形式、キリスト教系の墓碑が多く、明治初期の離壇政策によるものと考えられる。(写真-9)



写真-9 神道系様式の墓

・南浜霊園一現存する「大坂七墓」の1つ

南浜霊園は同市北区豊崎にあり、行基が開設したと伝えられる大阪で最も古い墓地の一つである。「大坂七墓」の中で現存する2つのうちの1つである。(写真-10) 天満宮の社家「菅原の朝臣」や大塩平八郎建立の墓など明治期以前の墓も多く存在するが、地域で管理する人がなく、現在大阪市で管理している。墓地の入り口には、1891年(明治24年)に建立された堂に道引き地藏尊があり、地域の人々の信仰を集めている。無縁整理され石



写真-10 南浜霊園入り口

碑が積み上げられた4つの無縁塚が平面図に残されているが、現在は石材が既に処分されて無い。1988年（昭和63年）に大阪市で墓碑調査がされ、記録が保存されている。

4. 無縁改葬から見る無縁化社会

都市の大きな社会変動は人口動態の変化から見る事ができる。大阪市は近代以降、都市の成長や日本全体の人口増加によって人口増加を続けてきた。しかし、墓は既に家族形態の多様化により既に無縁化しているが、少子・高齢・人口減少社会の更なる進行により、無縁墓が増加すると予測される。これまで、どの様に無縁墓が推移し、墓地は対応してきたのかを見よう。

先に南霊園の一番奥に無縁墓があると述べた。無縁墓は新しい利用者に墓地を提供できない、放置されて管理ができず、管理料も納入されないなど、墓地の管理運営上大きな問題を抱えている。南霊園は、開設が1874年（明治7年）と古く、「使用していない墳墓があり、霊園の環境整備の観点から、1986年（昭和61年）8月から無縁墳墓の調査を開始し、1992年（平成4年）度末をもって一定収束したため、1993年（平成5年）度から1995年（平成7年）度にかけて、無縁墳墓の移転を行い、約750基の改葬を行った」（大阪市環境事業局、2003）とある。また、長年にわたり祭祀実体の無い墳墓について、使用意思の無いものを順次整理をしている。

北霊園においても1994年（平成6年）度から無縁墳墓の調査を実施しており、1998年

（平成10年）度から調査により判明した無縁墳墓の移転改葬と跡地整備をしている。

さらに現在も大阪市は北霊園と瓜破霊園の墳墓改葬に取り組んでいる。2010年（平成22年）度墳墓整備事業の実績によると、現在調査中であるが、瓜破霊園では調査中の区画は524、現地公告中は16、公告終了し改葬可能は41ある。北霊園では、これも調査中であるが調査中の区画は22、現地公告中397、公告終了し改葬可能は364である。現在の区画の使用状況は瓜破霊園は93%が使用中であるが、古い北霊園は49%になっている。

南霊園には、無縁墓を整理納骨する無縁塚



写真-11 無縁者の墓

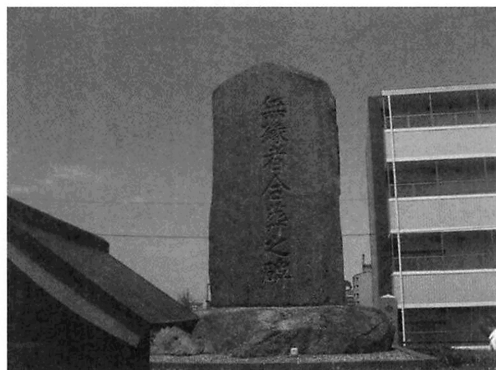


写真-12 都市の無縁者の墓

(写真-11)と、身寄りの無い孤独死や、骨壺が引き取られない人たちの納骨堂(写真-12)が設置されている。近年無縁墓への埋葬は年間約1300人であり、増加傾向にあるという。

まとめ

大阪市の公設墓地は、都市の発展とともに配置や設置数、墓地様式、管理体制また跡地利用などを変化させ、社会経済構造の変化に対応してきた。墓地の都市における位置と面積は都市の人口増加と都市域の拡大と連動しており、墓地の計画・設計と墓地様式は、都市計画における墓地の位置づけや、家族の制度の理念や家族形態の変化による意識の変化と連動している。また墓碑から宗教上の変化も見ることができる。また共同墓や無縁塚から、市民の不慮の死を招いた大事故や大火災、自然災害、戦災、疫病の流行など都市に変動を起こした出来事も記している。個人と家族という〈個〉と〈群〉の関係は、家族の形態と意識の変化により、墓・墓地の無形化、共同化、有期限化の方向にあることを既に示した。しかし、都市に生きる人々を〈群〉としては、個人のライフヒストリーを超えてその集合体は、都市を誰が創ってきたかを示す都市を形成し、都市の変化を記録する、都市史として重要であることがわかる。また墓地は都市の時代ごとに設置され、その配置や墓地様式などから墓地の集合体、都市施設である墓地〈群〉として都市形成と発展の歴史を示している。

現在は都市の拡大・発展期から少子・高

齢・人口減少社会に直面しており、無縁化社会が進行する。墓の無縁化が進めば都市の記憶、記録としての墓や墓地は消滅していく可能性がある。それらの意味から、家族変化による〈個〉としては、墓・墓地の無形化、共同化、有期限化の方向であるが、都市に生きる人々や墓地の〈群〉としては都市史としての重要性を認識する必要と、その手立てが必要になっている。

参考文献

- 大阪市、1949、「大阪市設霊園条例」(昭和24年制定、平成13年改正、平成23年改正)
- 大阪市環境事業局、2003、「大阪市における墓地のあり方検討にあたって」2月
- 大阪市環境事業局、2002、『平成14年度大阪市の環境事業』8月
- 大阪市環境事業局、2010、『平成22年度わたしのまち・きれいな大阪』9月
- (財)大阪市環境事業協会、2011、『平成23年度大阪市設霊園募集』5月
- (財)大阪市都市工学情報センター、2010、『大阪人』「阿倍野掃苔録・阿倍野に眠る」9月号
- 毎日新聞社、2011、『毎日新聞』「わが町にも歴史あり／知られざる大阪・阿倍野墓地」10月6日付
- 毎日新聞社、2011、『毎日新聞』「わが町にも歴史あり／知られざる大阪・続阿倍野墓地」10月13日付
- 毎日新聞社、2011、『毎日新聞』「わが町にも歴史あり／知られざる大阪・続々阿倍野墓地」10月20日付
- 榎村久子、1994、「近代日本墓地の成立と現代的展開」京都大学博士論文、3月
- 榎村久子、1996、『お墓と家族』朱鷺書房、6月

A history of the city of Osaka seen from the Transformations of its cemeteries in a disconnected society

MAKIMURA Hisako

〈Summary〉

The graves and cemeteries of a big city have been undergoing significant transformations such as individualization, alienation and fluidity as a result of its modernization and urbanization. We also notice the recent appearance of shared or intangible and even time-limited graves. This paper intends to analyze how a big city such as Osaka has been trying to maintain a space for cemetery in a society where a number of great social changes have occurred. Some changes had begun in the Meiji period (1868–1912) and the most important one in recent years has been the phenomenon called the aging and declining population. Therefore, our analysis tried to trace relations between the transformation of the public cemeteries and the social development of the city from the Meiji period to the present time, taking the examples of the cemeteries at Minamihama, Minami, Uriwari, Hattori and the Sennan Memorial Park. As a result, I found that the cemeteries and the epitaphs can serve as a means to know not only the life history of one person as an “individual” but also that of the “group” of people who lived in the city in an increasingly disconnected society. This means that the study of the cemeteries and the graves is a part of urban history which registers and memorizes the development and changes of the city.

Keywords : cemetery, urban history, the city of Osaka, urbanization, disconnected society